



日本

ハンザキ研究所ニュース 2011(3) : 通巻 No. 63

発行2011年3月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

シンコ・モンスター

春を告げるイカナゴの“新子”の漁が始まった。毎年のことだが漁獲予想が出されて、話題になる。カタクチイワシの子は“シラス”と呼ばれるがチリメンジャコとして食卓にぎわす。こんなに小さな魚を大量に捕獲しても絶滅しないとは驚くばかりだが、もしも1年だけでも漁を中止したらどうなるのだろうか。大きくして食べた方が効率的だと思うが、食習慣と言うか食文化の故か中止されることは無い。少し前のことになるが“チリメン・モンスター”(チリモン)が流行った。しかし、シラスは白い方が高級であるということから徹底的に混獲物が取り除かれてしまい、楽しみが少なくなってしまった。選別の現場に行けば取り除かれた宝物の山があるという。今年のイカナゴ漁は3月9日に解禁となったものの、低水温のためかまだ小さすぎるとの報道があった。



シンコ・モンスター A: シンコ B: マイワシ C: ズエア D: メガロパ E: イカ

チリメンと異なり、シンコの場合には混獲物が除去されていないので色々な生き物を見つけることができる。腹が赤いのは食べているプランクトンの色だ。これは顕微鏡で覗かねば正体が分からないだろう。しかし、モンスターたちは肉眼で見つけることができる。特にエビやカニの子供たちは熱を加えられて真っ赤になっているからすぐに分かる。もっとも“クギ煮”になったものでは駄目なので“釜揚げ”の方で挑戦して見て下さい。エビやカニの子供たちはズエアとかメガロパなどと呼ばれるプランクトン生活を過ごした後、親と同じスタイルに変身して海底生活に移る。この変態前の色々なステージのものがシンコには混じっている。12月から1月にかけて産卵するイカナゴは、夏の高温期には海底の砂の中に潜って“夏眠”するという珍しい生態が知られている。



写真1 マムシに咬まれて5分後(矢印は咬まれた所)



写真2 減張切開



写真3 咬まれて4日目の腕の変色



写真4 減張切開の縫合



写真5 ハンザキ・ケーキに入刀



写真6 ハンザキ・ピナ

マムシに咬まれた人の話

先日、マムシに咬まれた方がその経過を自分で写真を撮っておいて発表されたと言う話がメールされてきました。こんな貴重な話は放って置けませんので、私はすぐに写真を送っていただきました。中々生々しい写真ですが、手の甲にも大きな傷痕があります。詳しい話が知りたくてご本人から教えていただいたことをここに紹介させていただきます。

丸山壮太 (21) さんは東京都小平市の方で、昨年8月に友人と高尾山 (東京都八王子市) に遊びにいったそうです。“生き物探し”をしていた時に、全長 30~35 ㌢のマムシを見つけて手づかみしようとして左手第2指に咬みつかれたとのこと。ポイズンリムーバー (毒を吸引して体外に出す道具) も持っていたのですが、傷口が2か所あったので口を使って吸い出した後、15分後に救急車で八王子医療センターへ運ばれ、アナフラキシーショックを防ぐための“ステロイド”注射、様子を見ながら“マムシ抗毒素血清”を打たれました。

咬まれた時には「針をさくっと刺した程度であまり痛くは無かった」そうです。5分後 (写真1)、10分後と撮影、2時間後には肘までかなり腫れ上がって、手の圧力が高まり血管や筋肉をそのまま圧迫していると壊死してしまう恐れがあるという診断で“減張切開”を受けました (写真2)。圧力を下げると共にマムシ毒を排出させることを目的にしている手術です。この時の切開のあとが手の甲や人差し指、親指に見られます (写真4)。点滴も体内の毒を早く出すために行われ、1日経つと毒も無くなりましたが、切開した傷の治療があつて5日間入院しました。傷が多少痛みましたが、4日目の腕の変色 (写真3) が見られたくらいで、軽く指を動かしてリハビリに努めたそうです。後遺症と言うほどではありませんが切開した傷の付近が少し感覚が鈍くなったように思えますとのこと。

これは大変に貴重な経験談だと思います。マムシが危険な毒蛇だと言うことは知られていますが、実際の様子は関係者以外にはほとんど知られていません。私は水族館時代に飼育係が厚いゴム長靴で作業中にアカエイに刺された時には、痛みを耐えている本人へ写真と痛みや腫れ具合などの記録を残すように“冷たく”申し渡しました。非情な上司と思われたかもしれませんが、刺されてしまったら仕方ありません、折角のこと (丸山さんもそのように考えたそうです) ですので後日水族館のニュースレターに経験談を書いてもらいました。アカエイの尾にある大きな棘は逆棘になっていて刺した後、引き抜く時に表皮が剥けて毒液が出ます。危険なことはよく知られており、漁師さんは網に入ったエイの尾を切り落としてしまいます。長い尾の無くなったエイは格好が悪いし本当の姿を見せることができません。尾を切らないでとお願いしてエイを運んできて、棘だけペンチで除去しますが、すぐに生えてくるので時々棘取り作業をするのです。

実際にアカエイに刺された人は少ないことでしょうが、ニュースレターを見た釣り雑誌の編集者から転載の依頼がありましたので多くの方に実感していただけたことでしょう。その他、ウミガメやハンザキに咬まれた飼育係の写真もコレクションしてきました。無論自分のハンザキ傷も撮影して、貴重な資料に加えています。

田口勇輝さんと長谷愛子さんの結婚

一昨年に3人目のハンザキ博士となり、昨年4月に広島市安佐動物公園の飼育係に採用された田口さんが、交際中の長谷（ながたに）さんと目出度くゴールインしました。二人とも当 NPO 法人の会員であり、双方の御両親も共に会員として支援していただいている。式は教会で厳かに執り行われたが、披露宴は正にハンザキ尽くしというところであった。受付には2体のハンザキ抱き枕がお出迎え、ハンザキ・パン、ハンザキ・クッキーとあり、クライマックスはウエイディング・ケーキもハンザキ・ケーキへの入刀と言うことで大いに盛り上がっていました。

田口さんとは7年ほどハンザキの縁でのお付き合いだが、先の長い研究には若い力へのバトンタッチが大事だ。私が40年ほどハンザキを追いかけて若い人たちが50~60年続けてくれたら野生の生き物を100年間追跡することが出来るということになる。100年で片が付くわけではないが、それでも自然の川で100年間も追いかけることができれば凄いいことだと思う。昨年、田口さんが私のフィールドで30年を越える追跡個体を数匹測定してくれた。台帳をチェックしてそう告げると「自分が生まれる前から生きているんだ」と感激していた。私は、乾杯の祝辞にこのような長話をしてしまったが、若いということはいくらやましい限りだと思った。本人がやる気持ちさえ忘れなければ100年の成果を手にすることができるのだから。今頃はオランダの博物館でシーボルトのハンザキを二人して眺めていることだろう。愛ちゃんの得意なイラスト・レポートが楽しみである。

.....

“岡山ハンザキを守る会”の設立を祝って

岡山県はハンザキの近代的な生態研究発祥の地である。明治時代に東京帝国大学の石川千代松博士が調査報告を残している。調査地は真庭市であり世界で唯一のハンザキ保護センターがあって、そこに石川標本が残されており、同じ敷地には“ハンザキ大明神”が博士のお陰で残されている。このようにハンザキのメッカなのであるが最近では県内に研究者がいらない上に、保護センターもないがしろにされてきた感があった。僅かに毎年8月7・8日に観光協会主催の“はんざき祭り”が開催されているだけである。

これでは石川先生が浮かばれないと言う思いがあって、昨年9月には第7回のオオサンショウウオの会を真庭市で開催してもらったところである。そして、この度27日に設立の会が開かれた。これを機会に誰かが中心になってハンザキを研究し保護保全の活動を盛り上げてほしいものだと思います。ハンザキそのものは特別天然記念物に指定されているが、岡山県には生息地が国指定の天然記念物にもなっている所がある。しかし、その現状はどうなっているのだろうか？ 気がついたら生息不適河川になっていて滅失された鳥取県の前例があるのだから、郷土の宝は地域の人を中心になって守っていくしかないと思う。その意味では今回の会の立ち上げには大いに期待しているところである。

雛祭り

日本各地でお雛様を道路から見える所に飾って、観光客の目を楽しませることが流行っている。昔は広い座敷があって女の子のいる多くの家では豪華なひな壇が飾られていたが、狭いマンションなどでは難しい。お蔵入りのままの人形が嘆いていることだろう。それを年に一度くらいは虫干しもかねて飾るイベントはそれなりに人気があるようだ。

話題づくりには、前年に活躍した人の人形を作ったり、干支の人形、特産品のお雛様となれば登場させたいのが“ハンザキ雛”である。グロテスクの代表とされてきたハンザキも最近では“なごみ”グッズとして人気者である。ハンザキ・ビナの提案は抱き枕同様に1年かかって今年の雛祭りに登場した。お馴染みの“いくの銀谷工房”のお母さんたちの苦心の作品である。可愛い人形に仕上がっていたが、小さくて近づいてよく見ないと衣装の派手さに目を取られてしまう。やはりハンザキは大きい方がいいと思ったので、来年には150 ㌔のハンザキ最大サイズのものを作ってほしいと注文を出した。

私は言うだけだから簡単だが、作るほうは大変なことだろう。端午の節句には“ハンザキのぼり”を作ってほしいのだが、これは屋外に出すので特別な生地が必要になる。玩具屋さんに聞いてみたら、鯉のぼりでも旨く風をはらんで泳ぐように設計されているのだそうである。となるとハンザキ型でバランスの設計から取り組まねばならないことになる。これは少し難しそうだ。それならばバルーンではどうか？

.....

タロー君のおやつの正体

前号で紹介した“寒がりタロー”君が狂喜して雪上でひっくり返っては、ガリガリと噛み砕いていたものの正体が分かりました。積もっていた雪が消えた後に小ジカの頭骨と下顎の片方、噛み砕かれた脛の骨が散乱していたのです。構内にはシカの侵入した形跡が最近は無いのになぜだろうか？ と考えていたら、何日か前に雪上をテンが何かを引きずった痕があったのを思い出した。外で見つけた子ジカの死体の一部を運んできたものようだ。

そういえば、近くのヒキガエルの産卵場の一つでイノシシとシカの死体を見つけた。シカの方はバラバラになっていたがイノシシの方は内臓が食われただけで本体は丸々残っていた。後日、奇麗にさらされた骨を収集してくるつもりである。この産卵場はイノシシのヌタ場になっているところで、獣道がはっきり分かっている。毎年のようにヒキガエルの卵がひっくり返され、陸上に跳ね飛ばされている場所である。5年間観察をしているが、年々卵塊の少なくなっているのが気にかかる。ここではアライグマによる食害は確認していないが、産卵に集まってくる親ガエルの数が減少していることを示しているのだから、何らかの原因があるはずである。産卵場だけで食われるわけではないだろうから、産卵場での確認が無くてもラスカルのなせることかもしれない。

ハンザキ研日誌

2011年3月

- 2日 1トトラック購入、中古で30万円
- 3日 大阪シニア自然大学から2名来所、講演受託
- 5日 事務局会議、8名
- 7日 円山川水系自然再生推進委員会、豊岡にて
- 9日 プランクトンネット入荷
- 10日 岡田・池田両氏が簾野の人工巣穴のハンザキ幼生の寄生ヒル調査
- 14日 兵庫県養父土木事務所の木戸所長他視察に
- 17日 兵庫県立大・三宅先生来所、今期の学生実習の検討
- 22日 大阪府安威川ダム環境委員会開催
- 24日 ・ヒキガエル卵の確認、毎年激減している
・アカネズミ1匹トラップへ2か月ぶりに
- 27日 岡山オオサンショウウオの会発足
- 29日 東京NHKより交雑種問題の取材打ち合わせに来所
- 30日 京都水族館設立準備室の関慎太郎氏他来所

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

11日に東日本の沖でマグニチュード9という大地震が起こった。そのために高さ十数メートルといわれる津波が発生し沿岸地域に大きな被害をもたらした。さらに福島県の前浜の事故が追い討ちをかけた。太平洋プレートが日本列島の下に潜り込んでいくことによって地震が起こることは知られている。ハワイ諸島がこのプレートに乗って日本に近づきつつあるなんてことは目に見えぬだけに信じがたい所があった。と言うことは、この先、何年後になるかは分からぬものの、また大地震が起こると言うことなのだ。

各地の前浜は、住民から嫌われて海岸に作られている。水族館も海岸に作られることが多い。ヒトが優先されるので魚どころではないと水族館関係の被害報道が聞こえてこないが、大なり小なりの被害を受けていることだろう。平成7年の兵庫県南部地震の時は、硬い岩盤の上にあった姫路市立水族館はコンクリートのひび割れが少し進んだくらいで済んだ。一方で海岸部の砂の上に作られていた神戸の水族館は大きな被害が出た。勤務中にテレビのニュースを時々見ながら大変なことだとは思ったものの、臭いも煙も届かぬ所には実感できなかった。救援隊が出ると言うことで水族館の車にタンクを積んで真水を運んだが、大きな施設からの大量の魚類を引き受けることは無理があった。小さなことかもしれないが、地震があると水槽の水が揺れてこぼれる。各家庭でもこの対策をしておく必要があるが、前浜も港も防潮堤もそのあり方について考えていかねばならないだろう。自然の力に勝てると思うのは間違っていると思う。どのように付き合っていくのかだと思う。

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)